

「東アジア沿海地域における鬪牛をめぐる ネットワーク形成の現状」 予備調査報告

尾崎孝宏・桑原季雄・西村 明

1. 本プロジェクトの目標および先行研究のレビュー（尾崎孝宏）

本報告は、鹿児島大学多島圏研究センターの共同研究プロジェクトである「南北連続『新・道の島々』センサーゾーン拠点形成～地球温暖化学際研究前進拠点と国際・地域貢献～」(鹿児島大学平成17年度教育研究活性化経費、以下「新・道の島々プロジェクト」と表記)の一環として行われている人文・社会分野研究「東アジア沿海地域における鬪牛をめぐるネットワーク形成の現状」(以下「鬪牛プロジェクト」と表記)の初年度における中間報告である。具体的には先行研究のレビューと各地の予備調査報告がその中心部分をなすが、それに先立ち、「鬪牛プロジェクト」を含む共同研究プロジェクトの全体像を示した後で、その中での「鬪牛プロジェクト」の位置づけを述べたい。

鹿児島大学多島圏研究センターでは、1999年より総合研究プロジェクト「多島域における小島嶼の自律性」を開始した。これは鹿児島より南方の海域に散在する小形の島嶼群を対象として、多分野よりなる研究者グループがそれぞれの専門領域を生かしつつ個別の課題研究を実施して成果を挙げるとともに、その成果を有機的に連携させ、総合させることで「小島嶼の自律性」を可能にするための条件を探ることを目的としている。

そうした大きな方向性の中で、本年度より南西諸島を対象とした調査研究である「新・道の島々プロジェクト」がサブプロジェクトとして開始した。その主たる研究対象は「道の島々」つまり九州から台湾に連なる島嶼部であり、地球温暖化や当該地域社会の変容をいち早く察知するためのセンサー

ゾーンの形成，あるいは現地での研究協力者ネットワークの形成が研究目標として挙げられている。

それを受けて「闘牛プロジェクト」は，その名のとおり闘牛という文化イベントに着目して発足した。「道の島々」の一つである徳之島で闘牛が盛んであることは，本論で改めて説明する必要がないほど有名である。また後述するように，徳之島に限らず日本各地に点在する闘牛は既にいくつかの分野で研究対象となっているが，これらの研究は一地点における定点観測的な研究およびその集合体としての比較研究として行われているものが大半である。

しかし現状は，後述のごとく2004年10月23日に発生した新潟県中越地震で被災した牛が徳之島に避難して現地の闘牛大会に参加した，というニュースに代表されるように，闘牛の主催者団体・参加者・牛のいずれのレベルにおいても個別地点の範囲を超えた広域的なネットワークを形成しており，この網の目の中を人・牛・情報が往来していることが予測される。ただしこうしたネットワークに関する分析は，従来の定点調査においては不向きな研究対象であるがゆえに，等閑視されてきた嫌いがある。

そこで「闘牛プロジェクト」では，闘牛を媒介にしたネットワーク形成の現状分析から，東シナ海を中心に日本海・太平洋の一部も含む東アジア沿海地域における，文化イベントを焦点とした地域間交流の可能性を提示することを目標とした。なお「闘牛プロジェクト」は，「道の島々」に属する徳之島や沖縄が闘牛においては単なる「道」すなわち通過点ではないネットワークのハブとして存在しており，かつそのネットワークの広がりが「道の島々」の延長上に分布している⁽¹⁾がゆえ，現地の研究拠点形成および対象地域全体の理解の一助にもなるという点で，親プロジェクトである「新・道の島々プロジェクト」の一端を担うという位置づけを行っている。

その中で，本年度は南西諸島の闘牛の二大ハブ地域である沖縄・徳之島，比較対照としての宇和島，仔牛の供給地である八重山の4地点での現地調査を予定しており，個別の調査報告のとおり3箇所ですでに調査を終了している⁽²⁾。また研究方法としては，「闘牛プロジェクト」参加者である尾崎孝宏・桑原

季雄・西村明の3名が共通のバックグラウンドとしている文化人類学的手法（現地調査による観察・聞き取り）により行われている。ただし、今後の分析視角については尾崎が畜産の対象としての牛，桑原が主催者団体，西村が参加者とする事で，より広範なトピックを取り扱う予定である。研究体制については，本年度は基本的な知識・経験の共有を目的として複数名による現地調査を行っているが，今後はより少人数で機動的に現地調査を行うことで，より効率的に広域エリアをカバーする予定である。

さて，以上のような認識の根拠となる先行研究のレビューを次に行おう。まず，既存の論文や著作について，その対象地域ごとに分類すると以下のようになる。なお，これらの文献は，国立情報学研究所のCiNiiおよびWebcatから「闘牛」をキーワードとしてヒットした文献および，それら文献に引用されている文献から構成されている。

徳之島：小林照幸 [1997]，曾我亨 [1991]，松田幸治 [1982]，山田直巳 [2001; 2004]

沖 縄：謝花勝一 [1989]，前宮清好 [1972]

愛 媛：石井浩一 [1992; 1993]，石川菜央 [2004]，愛媛県教育委員会文化財保護課（編） [2002]

隠 岐：山田直巳 [2002; 2003]

岩 手：藤原弘 [2001]

新潟および愛媛：広井忠夫 [2002]

多地域：石井幹 [1989; 1990a; 1990b]，広井忠夫 [1998]，松田幸治 [2004]

この中で，最後に挙げた多地域に関するものは，基本的に各地の闘牛の現況紹介である。また，そのうち広井 [1998] は自らの主たるフィールドは新潟であることを，松田 [2004] は徳之島であることを述べている。そのほか，山田と石川が2箇所フィールド調査経験を持つことが上述の先行研究およ

びその他の情報から推測可能であるが⁽³⁾、それ以外については1箇所のフィールドのみに関する著作である。つまり、上述の20点のうち9点、15著者のうち8著者がそれに該当する。いずれから計算しても、半数近くは1箇所の闘牛にのみ関わる文献であると結論付けられよう。

一方、地域別の分布については徳之島と愛媛が他の地域よりも数的に多く、比較的研究が進んでいる地域と位置づけることができよう。そのうち、徳之島は民俗学者とジャーナリストの独壇場であるのに対し、愛媛については民俗学に加え人類学（スポーツ人類学：石井浩一）・地理学（民俗地理学：石川菜央）と研究者の専門分野の幅が広いのが特徴となっている。無論、上述の研究においては、筆者が独断で専門分野を民俗学と分類したものでも、現在の最先端の研究である以上そこにはいわゆる「伝統」のみならず、広く社会経済的な現象に目を向けたスタンスが取られていることは論を俟たない。しかし、これらの著作が民俗学的研究を目指す以上、ある行事を通じて地域共同体を浮かび上がらせるというテーゼから完全に自由であることは困難であるようにも感じられる。

例えば、曾我は牛の売買に関する詳細な報告を行うにもかかわらず、最終的には「闘牛は『ランク』の頂点を目指しておこなわれるゲームである（中略）牛のランクもまた持ち主に転嫁されていると考えられる」[曾我 1991：44-45]と、ギアツ流の「彼らの意味の世界」[ギアツ 1987]にその着地点を求める。また山田は「闘牛の社会経済的考察」と題した論文で「闘牛は徳之島というやや自己完結的な社会の中で、非常に重要な社会的機能をになってきた」[山田 2004：215]と、やはり共同体内部の論理を模索する。なお隠岐に関しても、研究者が同一である以上、似たような研究傾向が見出される。沖縄に関しては、意外にも近年の文献が存在しないこともあり、現状報告を超えた理論的バックグラウンドに関して最新・最先端とは呼びがたい状況にある。

しかし、山田が上記論文を発表する数年前、既に広井は徳之島の闘牛について「今では新潟経由ではなく直接岩手県に行って仕入れてくる。軽米町、

山形村などによく見に行くという」[広井 1998:32]と記述している。また、筆者の乏しいフィールド経験の中でも、徳之島では八重山産の牛が多いと語る観客（ただし本人も牛主である）が存在し、また徳之島と沖縄本島を頻繁に往復する牛・牛主・勢子などは珍しくない。つまり少なくとも闘牛に関しては、徳之島は自己完結的ではない。またそれゆえに徳之島の闘牛は、ローカルな意味の世界だけでは把握しきれない豊富なボキャブラリーを含有する事象であることが推測される。

それでは、研究の幅がより広いと思われる愛媛の研究についてはどうか。同時代的な事象に最も強い関心を示しているのは石川 [2004] である。石川の研究においては、徳之島から宇和島へスカウトされてきた勢子の事例紹介など地域を越えた闘牛を巡る社会的ネットワークの存在が示唆されている。しかし、最終的に議論は「宇和島地方での闘牛の存続要因」の解明へと収斂し、広域的なネットワークは地域に関する議論の背景へと押しやられる [石川 2004:964-970]。

以上のような先行研究のレビューを通じても、「闘牛プロジェクト」が目指す主催者団体・参加者・牛が形成する広域的なネットワークの調査研究は、従来着手されていない独創的な着目に由来する研究であることが明らかであろう。

2. 沖縄予備調査報告（西村明）

沖縄本島は、毎週のようにどこかの闘牛場で闘牛大会がおこなわれていると言えるほど、闘牛が盛んな場所である。2005年の予定を例に言えば、年間34の大会が組まれている。沖縄における予備調査には、尾崎と西村が参加し、具志川市の安慶名闘牛場の見学と、2005年9月11日日曜日16時から沖縄市営闘牛場で行われる予定であった「準全島靖士だ友人会結成大闘牛大会」（主催：胡屋闘牛組合、共催：琉球新報社、後援：沖縄タイムス社）を観察した。ここでは、闘牛大会の様子について報告したい。

われわれは15時過ぎに会場に入った。遅い取り組みであろうと思われる牛

を乗せたトラックもこの時間帯に会場入りしていた。入口にテントが設営されており、そこで入場料3千円を払う。入口付近にはほかに飲食物を売る出店や、過去の闘牛大会の様子を収録したビデオを売る業者の出店があった。この露天で売られるビデオは、徳之島と同様、牛の牛主が次の対戦相手を研究するとき使用するもののようなものである〔曾我 1991：6〕。入場料と引き換えに、当日の取り組み表（B4版）と、翌週9月18日におこなわれる「石川イベント広場閉場記念闘牛大会」、翌々週9月25日におこなわれる「野國總管甘藷伝来400年祭記念闘牛大会」の予告取り組み表（A4版）が手渡される。会場に入ると試合開始まで、スピーカーから繰り返し「ワイド、ワイド、ワイドー、我きゃ牛ワイドー、全島一ワイドー…」と徳之島闘牛のことを唄った新作シマウタ「ワイド節」が流れていた。

会場となる沖縄市営闘牛場は、沖縄南インターチェンジのすぐ近くにあり、市営体育館や陸上競技場に隣接している。那覇インターチェンジからのアクセスは15分ほどの場所である（なお、沖縄市は、那覇市から北北東22km、沖縄本島の中央部に位置している）。

会場の様子は、土俵部分を中心に、その周りを1mほどの高さの土手が囲み、土手の上には鉄パイプ製の柵が設けられている。柵から外は客席部分となり、階段状のコンクリート作りの椅子席が14段の高さまである。その一角には、牛の入場口があり、入場口の向かい側には本部席が設けられている。そこには、主催者の関係者と思われる人物と司会進行役が座っており、賞品となるミニバイクやDVDデッキなどが並べられていた。また、入口の露天ビデオの業者のものであろう、大型のビデオカメラが2台、それぞれ客席最前列の別角度に陣取り、土俵の様子を狙っている。客席の外側には、ナイター設備も4基設置してある。9月末から6月頃までの大会は正午あるいは13時に開始されることがほとんどだが、夏場は16時や18時といった遅い時間に開始される。そのため、試合の最後のほうの取り組みでは、ナイター照明が灯されることになるわけである。牛の入場口から会場の外に出ると、出番を待機する牛のための細長い牛舎が設けられているが、一頭ずつ壁で仕切られて

おり、前面の壁にはそれぞれの牛の名前を書いた紙が貼られている。

会場では15時40分になると、闘牛場の土俵側面の土手一円に塩がまかれ、牛の入場口に盛り塩がおこなわれたが、おそらくこれは浄めのためと思われる。その後、アナウンスが入り、新聞の予定掲載時間が17時からとの誤記があったため、あいだをとって16時30分から開始する旨が伝えられた。

開始5分前には、牛の準備を呼びかけるアナウンスがあり、牛主の名前や牛の体重、出身地、戦歴などが会場に伝えられる。また、試合によっては懸賞品がつくものもあり、それも報告される。時間になるとそれぞれの牛が4～5名の勢子とともに入場してくる。入場口はひとつであるため、一方の牛が先に入り、続いて対戦相手の牛が入場するかたちである。取り組みを行う牛は尾の先に紅と白のはちまきを巻いて識別を行う。牛には鼻ひもが通されており、牛同士が頭を合わせて取り組みが開始すると、そのひもはすばやく抜き取られる。なかには、ひもをいったんはずした後に、なかなか立ち合いがうまくいかず、ひもをもう一度通して、仕切り直しするケースも見られた。牛が、立ち合いを拒むと、会場から「ああ」というどよめきが起こる。

取り組み中、勢子はそれぞれの側から1人ずつ牛の左側に立ち、声と右手のしぐさで牛に指示を出す。牛に触れることもあるが、左手は後ろ手にしたりして、出すことはなかった。攻めを促すときには、もちろん個人差はあるが、「デーワ」などの掛け声（ヤグイ）を張り上げつつ、牛の顔の近くで右手（特に指先）を下から上に激しく動かし、右足で地面を何度も踏み鳴らす。勢子もかなり体力を消耗するようで、2～3分毎に別の勢子が近づいてきて交代を促していたが、これは同時に、出番を待ちきれないからといった様子でもあった。勢子たちは違う牛の取り組みでも同じ顔ぶれが何度も登場していた。

勝利した牛の角には、勢子が自分のタオルなどをくくりつける。また、背中には、本部席から手渡された化粧まわしが掛けられる。中には、牛主の子供であろうか、牛の背中に乗り勝どきをあげている風景も見られた。

沖縄市営闘牛場は最大で4千人収容できるとされるが、当日の観客の入り

